

マリオ・フラッティの政治劇

タニア

の上演

パティ・ハースト事件を素材にブレヒト風に

フラッティ



パトリシア

パティ・ハースト事件を素材にしたマリオ・フラッティの政治劇『タニア』が十一月五日から二十三日まで、ニューヨークで上演される。

アメリカでは数少ない政治劇作家として彼らが、何

家として注目されているフラッティは、財閥の令嬢が誘拐事件の人質からSLA(シンバイオオニーズ解放軍)の闘士「タニア」に変身し、資金調達の銀行強盗に加わった前代未聞の事件に当初から関心をいたが、昨年五月、パティを除く主要メンバー六人がFBIの急襲を受けて惨殺される事件が起きると、たちどころに戯曲の執筆を開始した。台本は、最近、インダの演劇専門誌「エナクト」(97・98号)に発表されたばかりであるが、去る九月十八日、パティがサンフランシスコで逮捕されたため、急遽、今シーズンの上演が決定した。演出、ロン・ナッシュ、音楽、ポール・ティック。

SLAのメンバーがすべて事名で登場するこの全三場の一幕劇でフラッティは、すでに懸念な神話にのみこまれようとしている彼らをスキャンダラスに描いたのではなく、アメリカの資本主義と権威主義の被抑圧者として彼らが、何

を考え、いかに闘い、そして彼らのかたわらでパティがどのようにその人生観を変え、新たな世界観を形成してゆくかを、愛情こめて描いている。

先に、上院議員選挙を痛烈に皮肉ったミニエリシカル・コメデイ『マダム・セナト』(75年三月)でアレヒト風のソング(エド・スコット作詞・作曲)をたっぷり聴かせた彼は、『タニア』では、ブレヒトの教化劇の手法を大幅にとりいれている。第二場のハイパーニア銀行襲撃のシーンでは、観客を銀行の客に見立て即興的な場面にし、闘士たちが観客にも銃をつきつけながら、「収入はいくら?」、「この国で政治的自由を感じているか?」、「真の自由とは?」といった質問を投げかけ、そこから、俳優と観客とのあいだで新たなダイアローグを展開するように構成されている。

日本で上演されたフラッティの政治劇はみな、平板な「イデオロギー劇」に単純化されてしまふ、彼の政治劇のもつ、おもむきや、やダイナミズムが失われてしまふようだが、常々フラッティ自身が語っているように、彼が師とする劇作家は、ピランデルロやアレヒトなのである。彼にとって政治は、単なる「イデオロギー」ではなく、演劇と不即不離の関係にあるものなのだ。つまらない、フラッティ劇なんてナン

▷ENVOI: 4 Chamehan Road, Delhi 6, India.